月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊 29 年目
創刊 1989 年 Nr. 330
2017年1月号

Friedrich von Amerling, Die Lautenspielerin, 1838 © Leihgabe der Gemäldegalerie der Akademie der bildenden Künste, Wien

杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 63

我が国の産官学の協力により、二〇一三年十二月からベトナム原子力界のリーダを担う人材、及び自立した研究者・技術者の育成を目的とした日本ベトナム原子力研究・人材育成フォーラムを開催している。第七回フォーラムが十一月二四～二五日にハノイで開催された。過去六回のテーマは、それぞれ熱流動、材料、研究炉、人材育成、非破壊検査、計測・制御だったが、今回は福島事故の現況と原子力の人材育成をテーマとし、両国で情報や意見交換を行うことにより、コミュニケーションの活発化を図ることが目的である。我が国からは、大使館、福井県、日本原子力産業協会、国際廃炉研究開発機構、電力中央研究所、日立、東芝、三菱、国際原子力開発、東工大、長岡技科大、東京都市大から計三名、ベトナムからは教育訓練省、放射線・原子力安全規制庁、ベトナム原子力庁、原子力研究所、ハノイ工科大学、電力大学、ベトナム国家大学ホーチミン市校、ダナン大学、デュイ・タン大学から約六十名、計約九十名の参加があった。

フォーラムでは我が国から九件、ベトナムから七件のテーマ関連の発表があった。また、我が国から七件、ベトナムから四件の学生・若手研究者による研究や人材育成についてのポスター発表を口頭及びポスター会場で実施した。筆者はこの口頭発表の際にベトナム原子力研究所のディエン氏と共同議長を務めた。最終日には両国の優秀なポスター発表に対して賞が授与された。フォーラム開会の二日前にベトナム国会で原子力発電所建設計画の実行中止決議が採択され、冒頭から波乱の会合となったが、将来再開の可能性はゼロではなく、人材育成は時間がかかることからフォーラムを継続してほしいとの先方の要望があり、どのように進められるか両国で検討することになった。各種制度により多くのベトナム人材が育ちつつあり、また、ポスター発表でも若手が明るい表情で質疑に答えていたのが将来に向けた大きな救いだったと思う。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の芸術大学について述べてみたい。音楽の分野ではウィーン国立音楽大学が最も有名である。一八〇八年創立の音楽院を起源に持ち二百年以上の歴史を誇る。特に、指揮科は世界最高峰といわれ、ワルター、カラヤン、アーノンクール、メータほか、多数の世界的指揮者を輩出している。次世代に伝統を継承するだけでなく、革新的な音楽の重要性を提唱し、世界トップレベルの音楽教育水準を誇る。さらにこの十一月には新しい図書館がオープンした。美術では、一六九二年に創立されたウィーン美術アカデミーが有名である。エゴン・シーレやオットー・ワーグナーなどを輩出している。図書館が有する十五万の図面はオーストリア国内最大規模を誇っている。

一方、一八八〇年に京都府画学校として創設された京都市立芸術大学は、芸術大学としては全国でも、もっとも長い歴史を有する。また、音楽学部の前身、京都市立音楽短期大学も全国初の公立音楽大学として発足している。日本画では、竹内栖鳳、上村松園、堂本印象を始めとする文化勲章受章者を十二名も輩出している。他にも吉原英雄などの版画家、佐々木マキなどの漫画家も輩出している。音楽分野では、本学出身指揮者の佐渡裕は二〇一五年九月からトーンキュンストラー管弦楽団の音楽監督を務めている。現在、西京区にある同大学は、京都駅の近くへ移転することが決まり、平成三五年度の供用開始を目指している。両市の芸術大学は、長い伝統と実績を有し、近年新しい動きがあるのが似ている。

余談であるが、筆者がウィーン赴任時にはウィーン音大の学生とソフトボールチームで一緒だった。京都では市立芸大出身の先生に日本画を習い、佐渡裕さんには四月にお会いすることができた。両市の芸術大学を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部に撮影をお願いしたウィーン音大の写真を掲載させていただく。

■杉本純 東工大特任教授 前京大教授 元原子力機構ウィーン事務所長■